

人はひどいことをしても なぜ悪いことをしたと思わないのか

——民族集団やマジョリティの属性によって正当化の論理は違ってくるのか——

木 村 英 憲

1. 目的

本論は人がひどいことをして悪いと思わないで平気なのは何故なのかという疑問を、アメリカにおける人種マイノリティへの差別の正当化を題材にして解明を試みるものである。もう少し詳しく言えば、用いられる正当化の種類が差別されるマイノリティによって異なるかどうかをみようとするものである。

2. 調査の概要

2.1 調査の方法

筆者は1984年、ボストンのWVCB TV, BostonというPBS (Public Broadcasting Stationの略。非営利の公共放送) で人種的偏見を特集する“A World of Difference: What’s your Attitude?”という番組で使うアンケートの作成を依頼された。この番組の作成にはブナイ・ブリス・アンチ・デフォメーション・リーグ (B’nai B’rith Anti-Deformation League, 対ユダヤ人中傷に反対する連盟)、マサチューセッツ州教育委員会もかかわっていた。アンケートは筆者の指導教官のニューヨーク州立大学ストーニー・ブルック校社会学準教授(当時)マイケル・シュワルツ氏と共同で作成した。

2.2 アンケートの構成

アンケートは4つの部門から構成される。1つ目は、5つの人種マイノリティ (黒人, 中国系, ヒスパニック, ユダヤ系, イタリア系) とカトリックが差別されている状況をプロの役者が演技している場面をビデオで見せ、これに対する反応を測定した3種類の質問項目である。3種類の質問項目の1つ目はマイノリティへのステレオタイプ

の有無, 2種類目は差別の認知に関する質問, そして3種類目は被差別者への共感の有無を測定する質問である。

4つの質問部門の2番目は、人種差別が行われている状況を言葉で書いたものと、これらを読んで被差別者の気持ちになるかどうかを聞く質問とからなる。4つの質問部門の3番目は、精神障害者に対する偏見や疎外感を聞く質問とからなる。4つの質問部門の4番目は、性別, 年齢, 職業, 宗教, すんでいる地域といった属性を聞く質問に加えて回答者自身が, あるいは父母が, あるいは祖父母がアメリカ生まれかを聞く質問とからなる(木村1987, 1989, 1990, 1991, 1997, Schwartz・木村1989)。

2.3 調査の時期

この調査は1984年12月にボストンのWVCB TVで実施された。

2.4 回答者の属性

ボストンとその周辺に327人の住民に回答してもらった。(木村1987, 1989, 1990, 1991, 1997, Schwartz・木村1989)。

この回答者たちのプロフィールは表1から表5に示した通りである。男女の比率は表1に示したように、ほぼマサチューセッツ州や全米と変わらない。

また人種構成については表2に示したように、白人が全米の比率、マサチューセッツ州の比率を上まわっており、その分、黒人、アジア系が少ない。なおボストン・サンプルで人種を回答しなかったものは、327人中、25人だった。

マサチューセッツ州の統計は、1990年の国勢調査のもので、全米の統計は1980年と1990年の

表1 マサチューセッツ州、全米との比較でみたサンプルの男女構成比

	男 性	女 性	合 計
ボストン・サンプル	137人 (44.6%)	170人 (55.4%)	307人
マサチューセッツ州	2,888,745人 (48.0%)	3,127,680人 (52.0%)	6,016,425人
全米	121,239,418人 (48.7%)	127,470,455人 (51.3%)	248,709,873人

注：ボストン・サンプルで性別を答えなかったものは、327人中20人いた。

表2 サンプルの人種構成（自己申告）

	白 人	アラブ系	アジア系	黒 人	合 計
ボストン・サンプル	294人 (97.4%)	1人 (0.3%)	2人 (0.7%)	5人 (1.7%)	294人
マサチューセッツ州	5,405,374人 (89.8%)	—	143,392人 (2.4%)	300,130人 (5.0%)	6,016,425人
全米 1980	188,371,622人 (80.3%)	—	3,500,439人 (1.5%)	26,495,025人 (11.7%)	226,542,203人
全米 1990	199,686,070人 (81.7%)	—	7,273,662人 (2.9%)	29,986,060人 (12.1%)	248,709,873人

表3 年齢

10代	7人 (2.3%)
20代	71人 (22.8%)
30代	61人 (19.6%)
40代	58人 (18.6%)
50代	50人 (16.1%)
60代	45人 (14.5%)
それ以上	19人 (6.1%)
合 計	311人 (100.0%)
平 均	43.4歳
SD	15.95歳

表4 就業状況

職に就いている	195人 (62.7%)
パートタイム	30人 (9.6%)
学 生	15人 (4.8%)
定年退職後	37人 (11.9%)
専業主婦	22人 (7.1%)
失業中	9人 (2.9%)
その他	3人 (1.0%)
合 計	311人 (100.0%)

表5 仕事の内容

半熟練、非熟練労働者	15人 (5.9%)
熟練労働者	42人 (16.6%)
部長、課長	38人 (15.0%)
係長、主任	20人 (7.9%)
事務職	30人 (11.9%)
営 業	6人 (2.4%)
自営業	20人 (7.9%)
専門職	65人 (25.7%)
重 役	17人 (6.7%)
合 計	253人 (100.0%)

注：SDとは standard deviation の略で、日本語では標準偏差。

平均より下の年齢、上の年齢がどのくらいばらつきがあるかを示す統計値で、大きければ大きいほどばらつきが大きく小さければ小さいほどばらつきが小さいという特性がある。

国勢調査の統計である、マサチューセッツ、国勢調査の合計は行の合計ではなく、ほかの人種を入れて合計したものである (Roberts 1995 pp.279, 282)。

年齢は表3に示したように平均43.4歳で、10代を除いてほぼ均等に分布している。仕事があるかどうかは表4に示した通り、回答者の3人に2人強の者が、すなわちフルタイムの195人、パートタイムの30人を足した225人、72.3%の者が職に就いている。仕事の内容は、最初の2つの労働者階級の仕事には57人、22.5%の者が、部長、課長から自営業までの5つ中産階級の仕事には114人、45.1%の者が、残りの2つの上層の階級の仕

事には82人、32.4%の者が、それぞれ従事している。

3. 分析のデザイン

ひどいことをしても平気かどうかをこの質問紙では、2種類の質問で聞いている。1つは回答者が加害者の行為を差別と認めるのかどうかという質問で、後の1つは被差別者の側に立っているのかどうかという質問である。

3.1 差別と認める、認めない

次の4つの質問に同意する回答者は差別と認めないと言える。

- ・加害者はかえってよいことをしている

人はひどいことをしてもなぜ悪いことをしたと思わないのか（木村）

表6 加害の正当化の種類

マイノリティ	黒人	ヒスパニック	アイルランド系	イタリア系	カトリック系
スキットに登場するマイノリティ	警官に職務質問をされる父と息子	白人住宅街の仏家を探している30代の夫婦	登場せず	最高裁判事の候補になったイタリア系男性	カトリックを馬鹿にする芝居に抗議するカトリックの男と女
場所	白人住宅街	不動産業者の店	学校の休み時間	検事総長室	劇場の前
差別者	白人警官	白人不動産業者	アイルランド家でない白人男子高校生	検事総長	抗議者に文句を言う芝居を見に来た2人の白人
差別の内容	白人住宅街にいてだけで職務質問	物件があるのになんと言っただけで貸そうとしない	アイルランド家は大酒飲みというジョークでバカにする	部下の女性に身体検査を求める	カトリックのことを小馬鹿にする演劇
かえってよいことをしている		○			
職務を遂行しているだけ	○			○	
不当な行為ではない	○	○		○	○○
マイノリティは問題を引き起こすでもって正当化	○	○○	○	○	○
登場人物のマイノリティは問題を引き起こしそう	○		○	○	
その行為は害はない			○		
抗議する権利を否定			○		○
憤る被害者を敏感すぎると責める					○
憤る登場人物を敏感すぎると責める			○		○

注：○は該当する質問の数。○が1つなら質問の数は1つ。2つなら質問の数は2つということ。

- ・加害者は職務を遂行しているだけ
- ・加害者のしていることは不当ではない
- ・マイノリティは問題を引き起こす
- ・加害者の行為には害はない

表6ではこれらの質問をマイノリティごとにまとめた。

3.2 分析するもの

比較の対象は条件の同じものにすべきである。この条件を満たすもののうち、本論では「差別者は単に仕事をしているだけで差別をしていない」というものと、「抗議するマイノリティは過敏」として非難するもの、これら2つの正当化をする回答者の出現率がマイノリティによって異なるかみてみたい。

3.2.1 差別をしているのではなく、単に職務を遂行しているだけという正当化

これら2種類の正当化は、次の2つのスキットについての質問でしている。

3.2.1.1 黒人親子に職務質問する白人警官

トヨタ車にのった穏和そうな黒人の親子（父親とティーンエージャーの息子）が白人住宅街で人を待っている。そこをパトロール中の二人の白人警官が通り過ぎる。しかし不審に思った警官は引き返して、この車のそばに止める。一人の警官が犯罪者に対するような口調で、父親に何をしているのかと聞き、身分証明書の提示を求める。その間にもう一人の警官が車の後ろに回り、盗難車かどうかをチェックする。助手席に座って父親と警官のやりとりを見ていた息子は、警官が立ち去ってから、何で抗議をしないのかといらだちを父親

にぶつけた（詳しくは付録のビニエット1を参照のこと）。

パトロール中の警官が引き返し職務質問したのは、トヨタ車の二人が黒人だからで、彼らには二人は立派な市民には見えなく、あやしく見えた、すなわち犯罪をおかすべくターゲットを探しているように見えたからであろう。だからこそ一人が盗難車かどうか車の後ろに回ってチェックし、もう一人が何をしているのか聞いたり、身分証明書の提示を求めたりしたのである。言葉には出さないが警官は行為によって黒人親子を犯罪者扱いしたのである。しかしあやしいことは出てこなかった。警官は通常のチェックだと言って立ち去ったが、犯罪者扱いしたことを謝罪しなかった。この二人が白人だったら引き返しチェック尋問をしていないことだろう。従ってこの警官の取った行為はダブルスタンダードという意味で差別である。

偏見を持っていない回答者なら、警官が引き返したこと、チェックし尋問をしたことは白人ならしない差別だと認識、判断するだろう。そして二人を犯罪者扱いした警官の行為に不快感や怒りを覚えることだろう。そしてこのような取り扱いを受けた二人の気持ち、すなわちこのチェック、尋問を受けている最中の二人の気持ちはいかばかりだろうと、心中を察することだろう。

しかし偏見を持っている白人は黒人親子の身になって考えようとしな。彼らにとって黒人は犯罪を犯すかもしれない人間だからである。その黒人が白人住宅地域にいることだけで、何か危害を加えられるのではという恐怖心を喚起されることであろう。したがって恐怖心を抱いている白人住民にとって、引き返して尋問し盗難車かどうかチェックするという白人警官の取った行動は、犯罪が起きたかどうか調べる正当な行為と映るであ

う。また尋問することによって黒人親子におまえ達は監視されているというメッセージを送ることで、早く立ちさらせようとする正当な行為とも思えることだろう。恐怖心がさっと条件反射のように出てしまう彼らは警官にうまく押さえ込んでほしいと思っていることだろう。そのような彼らはいわば警官の肩越しに黒人親子を見ているのであって、親子に視点を置いて親子には警官の態度、取り扱いはどのように映じたのか、どんな気持ちでいたのか感情移入する余裕はないことだろう。

3.2.1.2 司法長官候補のイタリア系アメリカ人に「身体検査」を命ずる検事総長

もう一つ、イタリア系アメリカ人をはなから組織犯罪と関係している決めつけるスキットがある。ある州の検事総長がペレグリーニーというイタリア系アメリカ人が司法長官に指命されたというニュースを聞いた。検事総長は部下の女性にペレグリーニーが組織犯罪との関係がないか調べるように命令する。部下の女性はアイルランド系の前任者の場合はそのような調査はしなかったと抗議するというスキットである。

3.2.2 分析結果

表7に示したように職務遂行による正当化に強く同意する回答者は、黒人の場合は24.1%で、6.5%のイタリア系の3.7倍もある。すなわち職務を遂行しているだけという正当化は、黒人の場合の方がイタリア系の場合よりも採択される確率が4倍弱大きいということである。

平均値の違いでみた場合

この質問には5つの選択肢がある。1が「強く同意する」、2が「同意する」、3が「分からない」、4が「不同意」、5が「強く不同意」という選択肢である。これらの回答には順序があるので、いわゆる順序尺度を構成する。そこで平均を

表7 黒人とイタリア系での職務遂行による正当の出現率の違い

質 問	全 体	内 訳		回答者
警官は地域を守っているだけ (差別の対象：黒人)	75.3%	強く同意	24.1%	320人
		同意	51.3%	
検事総長はただ単に仕事をしているだけ (差別の対象：イタリア系アメリカ人)	31.3%	強くそう思う	6.5%	310人
		そう思う	24.8%	

表8 黒人とイタリア系への差別の正当化
—平均の比較

	平均値	標準偏差	度数
警官は地域を守っていただけ	2.23	1.048	307
検事総長は職務を遂行しているだけ	3.21	1.116	307
F 値：3383.272	有意確率：0.1%以下		

とってみて、1に近くなるほど、強く同意するに近いということである。すなわちこの職務を遂行しているだけという正当化が用いられる傾向があるということである。

表8に示したように、「警官は地域を守っているだけ」の平均は2.23で、「検事総長は職務を遂行しているだけ」の平均は、3.21である。ということは、割合でみた表7と同じように平均でも、職務遂行による正当化は黒人の方がイタリア系よりも採択される傾向が1.4倍大きいと言える。

3.2.3 統計を使った仮説検証の論理と有意確率

しかしもしかしたらこの平均の差は偶然で生じた可能性も考えられる。そこで黒人、イタリア系への差別に対して職務遂行の正当化が用いられる傾向の違いが人種による違いから生じたものだということが言えるためには、偶然でこのような違いがでた可能性をつぶす必要がある。そのために人種によってこの正当化が用いられる確率に違いがないと仮定してみる。このような仮定は帰無仮説と呼ばれる。帰無仮説が正しいと仮定したとき、偶然で生じる確率はどのくらいかを求める。その確率を有意確率と言う。この有意確率が5%を切っているとき、帰無仮説を棄却し、職務遂行による正当化は黒人かイタリア系かで違いがあるという仮説、すなわち対抗仮説を採択する。これが統計的に分析する際の論理であるが、一般的に背理法と呼ばれる論理を下地にしたものである。

3.2.4 分析のデザイン 一要因の反復測定

平均の違いが偶然で生じたとする有意確率を求めるために、一要因の反復測定という分析を採択してみる。要因とは違いをもたらす原因のことである。ここでは黒人かイタリア系かという人種の

違いである。なぜ反復測定と呼ぶかということ、同じ回答者がこれらの2つの質問に答えているので、いわば同じ回答者が繰り返して、反復して回答をしているからである。他方、このボストンの回答者と別の回答者にも同じ質問に答えてもらった場合は、反復がない、回答者同士は「互いに「独立している」という言い方」や「対応なし」という言い方」がされる。

3.2.5 分析結果

この分析をすると、人数は同じ人数に統一される。平均値は別々に求めたときより若干差があるが、傾向は変わらない。

この平均の違いを折れ線グラフにして示したのが図1である。

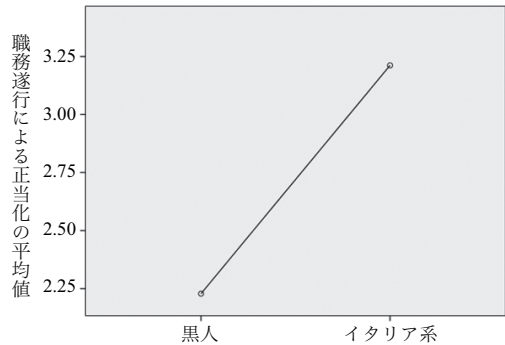


図1 黒人とイタリア系による平均値の差

この平均の違いがでた確率の大きさを示すF値と呼ばれる統計値は3383.272で、この大きさのF値の有意確率、すなわち偶然でこれだけの開きが生じた確率は、0.1%を下回っている。

3.2.6 何がこの違いをもたらしているか

この背景には黒人に対する恐怖心がイタリア系に対する恐怖心より大きいことがあると考えられる。事実、表9に示したように、黒人を偏見の目で見ると回答者の割合は21.2%で、イタリア系の3.2%の7倍弱もある。

しかし平均の違いとしては、表10に示したようにあまり出て来なかった。

反復測定にかけてみてもF値は1.239と小さく、有意確率も26.7%と5%水準をクリアしなかった。

表9 黒人とイタリア系への偏見—割合での比較

質 問	全体	内 訳	
黒人親子にはあやしいところがある	21.2%	強く同意	2.8%
		同意	18.4%
イタリア系のペレグリーニは組織犯罪と関係がある	3.2%	強く同意	1.3%
		同意	1.9%

表10 黒人とイタリア系への偏見—平均の比較

	平均値	標準偏差	度数
黒人親子にはあやしいところがある	3.64	1.114	316
イタリア系のペレグリーニは組織犯罪と関係がある	3.72	.813	316
F 値：1.239	有意確率：26.7%		

3.2.7 被害者を責める論理

3.2.7.1 どういう論理か

被害者を責める論理とは、セカンドレイプのように被害者に落ち度があるとか、あるいはセクハラのように被害者は取り過ぎだということで被害者を責める論理のことである。心理学者のウィリアム・ライアンが作った“victim-blaming”という言葉である (Ryan 1971)。

3.2.7.2 誰を責めるか

アイルランド系アメリカ人を大酒飲みだから、いちばん飲酒しない月はいつだと聞いた男子高校生が1年でいちばん短い月の2月と言う。被害者はアイルランド人であり、アイルランド系アメリカ人であり、また本人もアイルランド系であるこのエスニックジョークに興味が悪いと抗議した女子生徒である (資料のピニエット3参照)。他方、カトリック教徒を小馬鹿にする芝居を演じている劇場の前で、反カトリック的と抗議する男と女がいる。この男女が劇場から出てきた夫婦のうち夫が、ただの芝居ではないかと反論する (資料のピニエット4参照)。

3.2.7.3 比率の差

アイルランド系とカトリックの違いは、表11に示したように、女子生徒を非難する確率は3倍弱もある。しかし平均では表12に示したとおり、

表11 アイルランド系とカトリックの違い—割合

質 問	全体	内 訳	
その女子生徒は過敏すぎる	56.7%	強く同意	9.5%
		同意	47.2%
抗議者はカトリックへの批判に敏感すぎる	18.3%	強く同意	3.2%
		同意	15.1%

表12 アイルランド系とカトリックの違い—平均

人種	平均値	標準誤差	95% 信頼区間	
			下限	上限
黒人	3.263	.066	3.133	3.393
イタリア系	3.481	.055	3.373	3.589
F 値：5.18		有意確率：2.3%		

ほとんど差がない。しかし、反復測定にかけてみると、F値は5.18と小さいが、有意確率は2.3%と5%水準をクリアしている。

この違いをもたらすものは何だろうか。エスニックジョークはたいしたことないじゃないかという意見に賛同するものは56.7%で、いや、そんなことないと答えるものは33.3%である。他方「反カトリックの芝居への抗議者は敏感すぎる」に賛同するものは18.3%にすぎない。このことから考えると、抗議しているのが女子高生であるのに対して、その芝居に抗議しているのは大人で、公の場で抗議していることが関係しているのかもしれない。

結 語

以上の分析から言えることは、アメリカ人も相手を見て本音をだすかどうか考えているという可能性があることである。黒人の場合は隠し持っていた黒人は犯罪をするという偏見はストレートにきくと10%もないのが、二人は怪しいという形をとり、さらには警官は仕事をしているだけという正当化につながるようである。アイルランド系もカトリックであるが、抗議者が大人か、子どもかで違いが出ているようである。

今後の課題は、2つある。1つは、このような違いが、白人、非白人、職業、アメリカ生まれか、移民の2世かどうかといった属性で有意な差

人はひどいことをしてもなぜ悪いことをしたと思わないのか (木村)

があるかみることである。あと1つは、被害者の立場にたってみるかというときに、被害者の人種がどう関係しているかをみることである。

参考文献

- 木村英憲 1987 “Situational Variables as Immediate Social Forces Affecting Attitude-Behavior Discrepancy in Interracial Interaction Settings” 『愛知学院大学文学部紀要』第16号, pp. 56-82.
- 木村英憲 1989 “A Questionnaire for the Ethnic Prejudice Study” 『愛知学院大学文学部紀要』第18号, pp. 96-112.
- 木村英憲 1990 “The Findings of a Questionnaire for the Ethnic Prejudice Study” 『愛知学院大学文学部紀要』第19号, pp. 107-119.
- 木村英憲 1991 「住宅差別にみる現代アメリカにおける潜在化した差別意識：成功の夢と不平等とマイノリティ」 『愛知学院大学文学部紀要』第20号, pp. 149-160.
- 木村英憲 1997 「感情移入欠如としての偏見：怖がり屋であいまいが好きな『小市民リベラル』」 『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』第13号, pp. 302-254.
- Merton, Robert 1976 “Discrimination and American Creeds”. *Sociological Ambivalence and Other Essays*: 189-261.
- Roberts, Sam 1995 *Who We Are: A Portrait of America Based on the Latest U.S. Census*.
- Rose, Peter 1990 *They and We: Racial and Ethnic Relations in the United States*. McGraw Hill.
- Ryan, William 1971 *Blaming the Victim*. Vintage.
- Schwartz, Michael, 木村英憲 1989 “Impact of Ethnic Stereotyping” 『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』第4号, pp. 83-114.

付録 本文中で分析したビニエツト

ビニエツト 1 白人警官 versus 黒人親子

英文テキスト	日本語訳
Setting: A white residential areas Characters: A black man (Black 1), his son (Black 2) and two white policemen	場所：白人住宅街 登場人物：黒人男性（黒人1）、その息子（黒人2）、二人の白人男性警官
Police 1: Quite day, huh? Police 2: Hey, did you notice that? Police 1: What? Police 2: The two back guys in the Toyota. Police 1: That's unusual, isn't it? Police 2: Sure is around here. Let's run a check on the car just to be safe. Police 1: You can call it in. I'll check it out.	場面1 警官1：静かな日だな。 警官2：おい、見たか。 警官1：何を。 警官2：トヨタ車の黒人二人だよ。 警官1：ちょっとめずらしいな。 警官2：たしかに、この辺では。念のためにちょっと調べてみようぜ。 警官1：君は署に電話で報告してくれ。おれは質問する。
Police 1: Is there anything I can do for you guys? Black 1: No, that's OK. Police 1: Do you live around here? Black 1: No, we don't. Police 1: Would you get out of the car? Black 1: Why? Police 1: Please get out of the car. Do you have some identification? Why are you parked here?	場面2 警官1：何か困ったことでも？ 黒人1：いえ、別に。 警官1：住まいはこのあたりですか？ 黒人1：いいえ、ちがいます。 警官1：車から出てもらえませんか。 黒人1：どうしてですか。 警官1：とにかく車から出てください。何か身分を証明するものを持っていますか。どうしてここに駐車しているのですか？ 黒人1：あのですね、お巡りさん。息子と私は人を待っているだけです。それが何か。 警官1：別に。 警官2：（警官1にむかって）車に問題はない。 警官1：わかった。 （黒人1にむかって）通常のチェックなだけです。
Black 1: Look, officer. My son and I are just waiting for someone. What's the problem? Police 1: No problem. Police 2: Car's fine. Police 1: OK. Just a routine check. Black 1: Yeah, routine! Police 2: What's he getting upset about?	黒人1：へえー、通常のね。 警官2：（警官1にむかって）あいつ、なにをいきまいているのだ？ 警官1：わからない。でもなにも害はくわえていない。
Police 1: I don't know. No harm done. Black 2: We should report them. Black 1: For what? Black 2: I don't know. Black 1: Hey, forget it. It does sure make you mad, though, doesn't it? I guess they just wanted to know why we were here. Black 2: I didn't know we needed a reason.	場面3（警官が立ちさってから） 黒人2：あの二人、訴えようよ。 黒人1：どういう理由で。 黒人2：わからないよ。 黒人1：気にするなって。でもたしかにあたまにくるわな。まあ、どうしてわれわれがここにいるか、ちょっと知りたかったのだろう。 黒人2：理由があるだなんて、知らなかったよ。

英文テキスト	日本語訳
<p>Setting: Attorney General's office Characters: Attorney General (AG), Lawyers on Staff, Lucy (LAW)</p>	<p>場所：ある州の検事総長の執務室 登場人物：検事総長，スタッフの弁護士数人，スタッフ弁護士の一人のルーシー</p>
<p>TV: On Capitol Hill earlier today, ceremonies were held to formerly nominate circuit court judge Dom Pellegrini for the position of Supreme Court justice. The position of opened when Justice George (sound under)</p>	<p>テレビの音声：ドム・ペレグリーニ巡回裁判所判事を正式に最高裁判所判事に指名する式典が本日，連邦議会で執り行われました。判事の席がいたのは，判事ジョージが（音が小さくなる）</p>
<p>AG: (picks up phone) Paul, would you see if Lucy is in her office? (pause) OK, ask her to come down here, will you?</p>	<p>検事総長：（受話器をとりあげて）ポール，ルーシーが部屋にいるか，みてくれないか（ちょっとして）じゃ，私のところに来るように言ってくれたまえ。</p>
<p>LAW: (entering) Hi, George. What's up? AG: Dom Pellegrini. He's been nominated to the bench and I want you to do the report on his background.</p>	<p>ルーシー：（入ってきて）ジョージ，どうしました？ 検事総長：ドム・ペレグリーニのことだけだね，最高裁判事に指名されたので，いろいろ調べて報告してくれないか。</p>
<p>AG: No problem. I'll have it in a couple of weeks. (turns to leave) AG: Wait a minute. I want more than the usual check.</p>	<p>ルーシー：わかりました。2週間で提出します。（部屋を出ようとする） 検事総長：ちょっと待ってくれ。ふだんの調査よりもっと詳しく調べてほしい。</p>
<p>LAW: (turns back) What do you mean? AG: Any civil or criminal actions against him... LAW: Fine. (turns to leave again) AG: Hey, hold on. I also want you to look into his family business connections ... or ... any possible crime to organized crime. LAW: I've never heard of Pellegrini tied up with anything like that. Do you know something I don't know?</p>	<p>ルーシー：（ふり返って）どうのことですか。 検事総長：民事や刑事で訴えられたことがないかとか。 ルーシー：わかりました。（また部屋を出ようとする） 検事総長：まだあるんだ。ペレグリーニの家業の顧客や取引先のこと，それにもしかしたら組織犯罪と関係もあるかもしれないのかも。 ルーシー：ペレグリーニがそういう方面と関係があるという話は聞いたことありませんが，検事総長は心当たりがあるのですか。 検事総長：いや，万が一のことを考えているだけだよ。全部，調べないと何も言えないだろう。</p>
<p>AG: No, I just want you to make sure. You never know where the skeletons are until you check out all the closets. LAW: We didn't look for organized crime connections when Judge Connolly was nominated and he has a lot more closets than Pellegrini! AG: (trying to reason) Hey, it's not my fault that the most of the organized crime figures in this state are Italian. LAW: (getting angry) No, it's not your fault. And it's not Pellegrini's fault either. AG: I tell you where the fault's going to be. If Pellegrini get on the bench and he isn't clean, what am I going to say? ... that we never thought to look?</p>	<p>ルーシー：コナリー判事が指名されたときは，組織犯罪との結び付きなんか調べませんでしたよ。しかもコナリー判事の方がいろいろありますよ。 検事総長：（言いくるめる口調で）この州の組織犯罪の者の大半がイタリア系なのは，私のせいじゃない。 ルーシー：（怒り口調で）たしかに。でもペレグリーニのせいでもないですよ。 検事総長：誰のせいにされるか教えよう。ペレグリーニが最高裁判事になって問題が出てきたら，なんて言えばいいのだ？ 検察は身体調査を考えもしなかったとでも言えと言うのか。 ルーシー：ペレグリーニがアイルランド系ならこんな身体検査をしないと思いますけど。 検事総長：（いらだって）いいか，何もなければ，心配することは何もないじゃないか。しかし組織犯罪と関係があるとしたら，暴くべきだろうが。違うか？ ルーシー：たしかなのは，コナリー判事が指名されたときは，こんなことをしなかったということです。</p>
<p>LAW: It seems to me we wouldn't be doing this if he were an Irish. AG: (exasperated) Look, if he's clean, he's got nothing to worry about. But if there is a tie to organized crime, we'd damn well better turn it up now. Right? LAW: All I know is we didn't do this when Judge Connolly was nominated.</p>	<p>ルーシー：（いらだって）いいか，何もなければ，心配することは何もないじゃないか。しかし組織犯罪と関係があるとしたら，暴くべきだろうが。違うか？ ルーシー：たしかなのは，コナリー判事が指名されたときは，こんなことをしなかったということです。</p>

ピニエット3 アイルランド人をからかうジョークを言う男子高校生 versus 抗議するアイルランド系女子高生

英文テキスト	日本語訳
<p>Setting: Highs school; hallway between classes Characters: Girl, Boy 1, Boy 2 and other kids</p>	<p>状況：休み時間、高校の廊下 登場人物：女子高生、男子高生1、男子高生2、他の生徒</p>
<p>Boy 1: OK, I've got one for you. What's a seven Course Irish dinner? (Others moan, roll eyes) A potato and a six pack! (laughs) (more reaction) I bet you don't know what month Irish drink the least in? (pause) February ... It's the shortest month!! (Bell rings. Students shake their heads and wander away. Girl 1 and Boy 2 walk together.)</p>	<p>男子生徒1：このジョークはどう？ アイルランド人のフルコースの7品って何？（他の生徒はウーン何だろうと視線があっちこっちいつている）ジャガイモ1個と6袋のジャガイモさ。（笑い声。さらに歓声） じゃ、アイルランド人が一番飲む日が少ないのはなん月か知っている？（沈黙） 2月だよ。いちばん日にちが短い月だろう。（次の授業の開始のベルがなったので、みんなそういうことかという顔をしながら、各人の教室に向かう。女子生徒1と男子学生2は一緒に歩く）</p>
<p>Girl 1: Glenn thinks he' so funny, but he's a real idiot.</p>	<p>女子生徒1：グレンは自分のこと、ジョークがうまいと思ってるけど、ただのバカよ。</p>
<p>Boy 2: Come on. It's only a joke. Girl 1: No, not to me.</p>	<p>男子生徒2：おい、おい、ただの冗談じゃないか。 女子生徒1：違うわ。私はそう思わないわ。</p>
<p>Boy 2: (teasing) What's the matter? Got your Irish hang-up?</p>	<p>男子生徒2：（冗談っぽく）どうしたの？ アイルランド系のこと言われたから気になっているの？</p>
<p>Girl 1: (shrugs) Maybe. He makes my family sound like a bunch of drunks.</p>	<p>女子生徒1：（肩をすくめて）かもね。だってあんな言い方されれば、うちの家族はみんな大酒飲みみたいじゃない。</p>
<p>Boy 2: Don't you ever tell Irish jokes?</p>	<p>男子生徒2：じゃ君はアイルランド人をおちよくったジョークを言うことないの？</p>
<p>Girl 1: That's different. When somebody like Glenn tells them and everybody stands around laughing, you know what? It hurts my feelings</p>	<p>女子生徒1：言うことはあるわ。だけどグレンのようにアイルランド系でない人にみんなに受けるアイリッシュジョークを言われるとね、心が傷つくのよ。</p>
<p>Boy 2: So tell him to cut it out. Girl 1: Oh, sure. What am I going to say? (sing a song) "Please don't tell Irish jokes' cause it hurts my feelings." Give me a break.</p>	<p>男子生徒2：じゃ、やめるように言えばいいじゃないか。 女子生徒1：よく言うよ。なんて言えばいいって言うの。（節をつけながら）「傷つくからやめて♪」とでも言えばいいの。勘弁してよ。</p>
<p>Boy 2: Hey, there're Irish Jokes, there're Italian Jokes. How'd you like to be Polish? Everyone tells those.</p>	<p>男子生徒2：あのさ、アイリッシュジョークもあれば、イタリアンジョークもあるじゃないか。じゃ、（めっちゃくちやひどい）ポーランドジョークを言われるポーランド系の気持ちになってごらんよ。みんなエスニックジョーク言っているじゃないか。</p>
<p>Girl 1: Would you tell jokes about Jews in concentration camps? (challenging)</p>	<p>女子生徒1：（それじゃ、これはどうなのという口調で）じゃ、強制収容所のユダヤ人のことをジョークにする？</p>
<p>Boy 2: Some people might, but I wouldn't.</p>	<p>男子生徒2：そういう人もいるかもしれないけど、僕はしないな。</p>
<p>Girl 1: Well, would you tell a joke about black people in front of a bunch of black kids?</p>	<p>女子生徒1：じゃ、黒人が大勢いるところで黒人をネタにしたジョーク言うの？</p>
<p>Boy 2: (slowly) No.</p>	<p>男子生徒2：（少し時間をおいて）いや、言わない。</p>
<p>Girl 1: Then why is it OK to tell jokes about Irish People in front of Irish kids?</p>	<p>女子生徒1：じゃ、なんでアイリッシュジョークだけはアイルランド系の高校生の前で言っているわけ？</p>
<p>Boy 2: Because Irish people or Italians or whoever laugh at them too. And half the time, they're ones who tell the joke. It's totally different.</p>	<p>男子生徒2：そりゃアイルランド系にしてもイタリア系にしても自分たちのことをネタにしたジョークを言うからだよ。それにエスニックジョークを言うのは、半分は自分達自身じゃないか。だからぜんぜん違う話だよ。</p>
<p>Girl 1: Not to me.</p>	<p>女子生徒1：私はそう思わないわ。</p>
<p>Boy 2: Then say something. Nobody's stopping you.</p>	<p>男子生徒2：じゃ、やめるように言えばいいじゃないか。</p>
<p>Girl 1: You've gotta be kidding. You're talking this personally. (shrugs) You know the real problem with Irish jokes?</p>	<p>女子生徒1：マジで言っているの？ 個人的にとらないで。（肩をすくめながら）アイリッシュジョークは何がいちばん問題か知っている？</p>
<p>Boy 2: What?</p>	<p>男子生徒2：何？</p>
<p>Girl 1: Some of the even make me laugh.</p>	<p>女子生徒1：私でさえおもしろいのがあってこと。</p>

ピニエット 4 カトリック教徒を小馬鹿にするお芝居の観客 versus 抗議する人

英文テキスト	日本語訳
<p>Setting#1: Inside the theater Characters: <i>Sister Mary Ignatius</i> played by a woman actress Setting#2: In front of the theater Characters: Man and Woman picketers, Theater patron1, Theater patron 2</p> <p>.....Inside the theater..... St. Mary Ignatius: You can expect to be in purgatory anywhere from 300 years to 700 billion years. This may sound like forever, but don't forget, in terms of eternity 700 billion years does come to an end. All things come to an end, except our Lord Jesus Christ.</p> <p>.....In front of the theater..... Man picketer: Take one of these home and read it. <i>St. Mary Ignatius</i> is anti-Catholic. Don't support anti-Catholic theater. Take-one of these home. Woman picketer: Here you go. Stop bigotry. Theater patron 1 (husband): What do you mean bigotry? It's just a play. Woman picketer: It's not just a play! It's an attack on the Catholic Church and people shouldn't support plays that attack someone's religion. Theater patron 1 (husband): Hey, it's just meant to be entertaining. Woman picketer: Do you consider it entertaining to insult the Pope, to ridicule baptism? This play makes fun of everything that Catholics are taught and it makes all nuns seem like fanatics! Theater patron 1 (husband): It's just exaggeration for the sake of comedy! Woman picketer: It's a nasty stereotype. That's what it is! Theater patron 1 (husband): OK, let me ask you this. Do you believe in the virgin birth? Woman picketer: Yes, I do! Theater patron 1 (husband): and hell, and purgatory? Woman picketer: Yes! Theater patron 1 (husband): ... and that the Pope is infallible? Woman picketer: Yes! Theater patron 1 (husband): OK, so if the Pope told you to do something, you'd do it. Woman picketer: Well, it would depend upon what it is. Theater patron 1 (husband): Then you're not a very good Catholic aren't you? Theater patron 2 (wife): Honey...</p>	<p>場所 1 : 劇場内 登場人物 : 女優が演じる修道女, シスターメアリー・イグナチウス 場所 2 : 劇場の前 登場人物 : 男性抗議者と女性抗議者, 観客 1, 観客 2</p> <p>.....劇場内..... シスターメアリー・イグナチウス : 煉獄には300年から700億年もいるかもしれません。こんなに長いと永遠のよう思えるかもしれませんね。でも忘れてはいけません。永遠の時からすれば、7000億年にしたって、すぎさってしまうものなのです。我らが主, イエズス・キリスト以外のすべてのものには終わりがあるのです。</p> <p>.....劇場の前..... 男性抗議者 : ビラです。家に持って行って読んで下さい。「シスター, メアリー・イグナチウス」は反カトリックの芝居です。こういう芝居には反対しましょう。ビラをどうぞ。 女性抗議者 : ビラをどうぞ。人をおとしめることは終わらせましょう。 観客 1 (夫) : 人をおとしめるってどういうことだ? たかが芝居じゃないか。 女性抗議者 : たかがお芝居ではないですよ。カトリック教会を攻撃しているんですよ。人の宗教を攻撃する演劇を支持してはダメですよ。 観客 1 (夫) : あんたね、娯楽目的でしょうが。 女性抗議者 : ローマ法王を侮辱したり、洗礼式をあざけり笑うのが娯楽だと言うのですか。このお芝居はカトリックの教えをこごとくバカにして、シスターたちを狂信者のように描いているのですよ! 観客 1 (夫) : おもしろくするために盛っているだけのことじゃないか。 女性抗議者 : 卑劣な偏見でしかないわ。 観客 1 (夫) : わかった, じゃ、聞かせてくれ。聖母マリアが処女でキリストを懐胎したというのを信じているのか。 女性抗議者 : もちろんです。 観客 1 (夫) : じゃ、地獄の存在も煉獄の存在も信じているのか。 女性抗議者 : もちろん。 観客 1 (夫) : 法王はぜったい間違い犯さないというのも? 女性抗議者 : もちろん。 観客 1 (夫) : じゃ、法王にやれと言われたことは何でもやるのか? 女性抗議者 : それは内容によるわ。 観客 1 (夫) : じゃ、お前さんはあまり立派なカトリック教徒じゃないということになるぞ。 観客 2 (妻) : あなた, もうそれ以上は</p>